とやまの伝統工芸 11の誇り

つくるって、愛だからさ。

故郷を愛し、日々を創意工夫する

火を入れる。材料を見極める。道具をつくる。心を静める。そして、一心にものづくりに打ち込む。とやまの工芸は、一人ひとりの職人たちが技と心をつないで、何百年と大切に受け継いできた精神の結晶です。朝に夕に雄大な立山連峰を眺めながら、冬の雪に耐え、辛抱強く働いてきた先祖からの思いを、現在まで受け継ぐ勤勉な人々。写真でご紹介しているのは、４００年以上の歴史を誇る高岡鋳物発祥の地、高岡市で鉄の美術鋳物を手がける工場の鋳込みの風景。とやまの工芸の原点が垣間見られる瞬間です。

とやまの自然や歴史、文化を生かし、真心を込めて、ものをつくる。それは、仕事の枠を超えて、自らを取り巻く環境や人など、すべてのものへの大きな愛情がなければ成り立たないことの連続です。とやまの工芸は、そんな善き心で、つねに新しい創意工夫を重ねながら、次の時代へと歩き続けています。

Traditional Clafts of Toyama

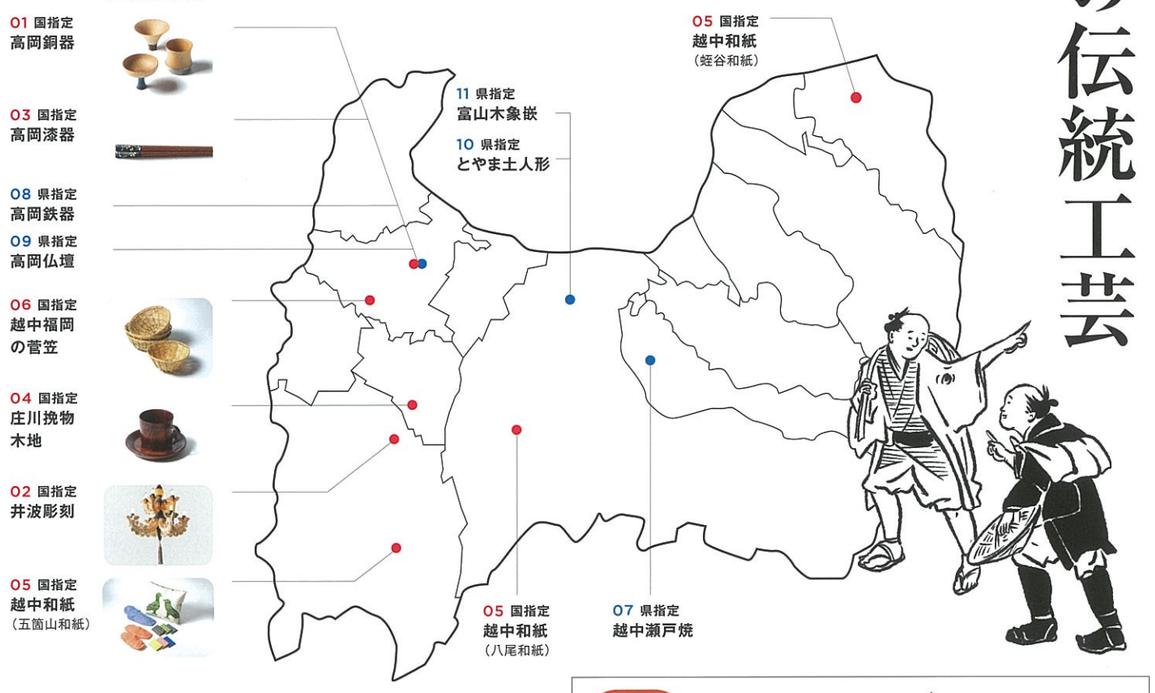
富山県の伝統工芸

日本海側を代表する「ものづくり」県、富山。標高3000㍍級の立山連峰、「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟する富山湾など自然豊かで、水資源に恵まれた土地です。一方で、かつて、冬は雪に閉ざされた厳しい環境の中で、積極進取の気性とともに、勤勉で粘り強い県民性が育まれました。伝統工芸の各分野でも長い歳月と人々の着実な努力により、高度な技術が磨き上げられ、それらは時代を越えて受け継がれています。そしていま、ものづくりに新たな息吹を吹き込み、世界を視野に深化を続ける作り手たちがいます。

国指定および県指定 伝統的工芸品の指定要件

	▼国指定	▼県指定
用途	主として日常生活の用に供されるものであること。	
製造工程	製造過程の主要部分が手工業的であること。	
技術技法	伝統的（概ね100年以上の歴史を有する）な技術技法により製造されるものであること。	
原材料	伝統的（概ね100年以上の歴史を有する）に使用されてきた原材料で製造されるものであること。	
製造規模	一定の地域において、ある程度の規模（10企業以上または30人以上の製造従者）があり、地域産業として成立していること。	一定の地域において、一定の数（原則5人以上）の者がその製造を行い、地域の特色を活かした伝統的な技術技法の継承が見込まれること。

技術を生かした新しい工芸品▼



＼ARで動画や製品を見よう／

ARアプリで、1、2ページにかざすと富山県の産業観光スポットの動画が、3ページの富山県地図にかざすと製品の3Dモデルがご覧になれます。

ARアプリは右の2次元バーコードからダウンロードしてください▶

iPhoneをご利用の方　Androidをご利用の方

CONTENTS

01 高岡銅器 ……P.4
400年以上の歴史と伝統を誇る、日本有数の銅合金鋳物産地

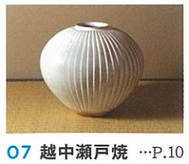
02 井波彫刻 ……P.5
200本のノミと彫刻刀で彫る木彫刻は、こぼれるような立体感が特長

03 高岡漆器 ……P.6
青貝塗（螺鈿）や彫刻塗の技は、現代の作品にも生きている

04 庄川挽物木地 …P.7
ロクロ挽きの、杢目が美しく口当たりが優しい食器や生活道具

05 越中和紙 ……P.8
八尾、五箇山、蛭谷の3つの産地には個性豊かな和紙がある

06 越中福岡の菅笠 P.9
全国からの注文が入る全国一の菅笠の生産地



07 越中瀬戸焼 …P.10
瀬戸焼をルーツに約430年の歴史を誇る、立山山麓のやきもの

08 高岡鉄器 ……P.11
高岡銅器で知られる高岡で、最初に作られた伝統の鉄鋳物

09 高岡仏壇 ……P.12
木地、彫刻、箔押し、金具、蒔絵、屋根などの技の総合芸術

10 とやま土人形 …P.13
優しい表情の土人形は、玩具や縁起物として人気

11 富山木象嵌 ……P.14
天然木の色合いを活かし、富山の自然や風物を自由に描く

11の伝統工芸その技の秘密をぜひ、ご覧ください。

日本有数の銅合金鋳物産地

高岡銅器

「日本遺産」認定のまち 高岡

指定団体　伝統工芸高岡銅器振興協同組合
〒933-0909 高岡市開発本町1-1
電話 0766-24-8265 http://www.douki-kumiai.com
主要素材　銅、亜鉛、鉛、錫の合金

富山県高岡市で作られる高岡銅器は、銅合金の鋳物では日本のトップシェアを誇ります。日本各地に設置される大小のブロンズ像やお寺の梵鐘、仏具、美術品、インテリア用品など、作られているものは実に多彩。高岡では、原型製作・鋳造・彫金・着色などの各工程ごとに、高い技術を持った職人たちが分業制で仕上げているのが特徴です。

高岡銅器のはじまりは、高岡に城を築いた加賀前田家二代当主前田利長が1611（慶長16）年に、近郷から7人の鋳物師を招き特権を与え、金屋町に鋳物場を開かせたことに始まります。最初は鉄の鍋・釜・鋤・鍬などの鉄鋳物で生活道具を作っていました。やがて、銅器の仏具などから製造が盛んになり、明治期に入ると、高岡の銅器商は旧加賀藩などの彫金や象嵌の名工たちを招き、高度な技を取り入れます。超絶技巧を駆使した作品はウィーン万博など、海外でも高い評価を得ました。

いまでは銅や亜鉛、鉛、錫（すず）の合金のほかにも、錫100%、アルミなどの素材を使った新しいものづくりが盛んに行われています。また、金属を腐食させて彩色する着色技術にも優れ、テーブルウェアなどの分野にも高岡銅器の新しい世界が広がっています。

◀梵鐘作りの技術が生んだ世界初の鋳造製ポットスチル

＼技術を現代へ／
CONTEMPORARY
着色技術と金属の重さを生かした酒器も人気

＼伝統的な技術／
TRADITIONAL
鋳造や彫金の技も見事な香炉、花器、仏具などを製造

point

伝統の技があるから、新しいものが生まれる。

茶器、花器、香炉など、高度な技巧を凝らした伝統的な商品は、国内外で人気です。そのほかにも、伝統技術を生かした、現代の暮らしに合ったものづくりが盛んに行われ、金属と木など、異素材を組み合わせたテーブルウェアや、錫100%の曲がる器、仏具のおりんの癒し効果を日常に取り入れたインテリア小物など、デザイナーともコラボした魅力的な商品が毎年各社から発表され、話題となっています。

能作は1916年創業の鋳物メーカーであり、錫100%の曲がる器が大ヒット。仏具、茶道具、インテリア雑貨、テーブルウェアのほか、医療分野でも商品を開発。本社にはショップやカフェがあり、多彩なイベントを開催。鋳物体験や工場見学も可能です（要予約）。

株式会社 能作

所 〒939-1119 高岡市オフィスパーク8-1
休 年末年始（工場見学についてはHPでご確認ください。）
問 HPでご確認ください ☎ 0766-63-0001
料 鋳物製作体験:1,000円～（小学生500円～）

高岡鋳物発祥の地、金屋町。千本格子の家並みが石畳に映え、江戸時代の建物も残る一帯は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定。高岡市鋳物資料館のほか、鋳物製品を展示販売するお店、アクセサリー作りなどの鋳物体験ができるお店もあります。

金屋町（高岡市鋳物資料館）

所 〒933-0841 高岡市金屋町1-5
休 毎週火曜日（火曜が祝日の場合は翌日）、年末年始
問 9:00～16:30
☎ 0766-28-6088

高岡銅器の工程、教えます

研磨

鋳造された金属を、バフなどを使って、粗いものから鏡面まで、さまざまな表情に磨き上げます。ベテランから若手へと、その高い技術が受け継がれています。

彫金

数十種類のタガネを使い分け、金属の表面に模様を彫り込む毛彫り、透し彫りや、異なった金属を表面に埋め込む象嵌などの細工を施します。

着色

薬品や食酢、米ぬか、植物、鉄くずなどを使い、金属を腐食させて色をつけます。煮色、おはぐろ、青銅色など伝統的な色のほか、新しい色も誕生しています。

ノミと彫刻刀で勝負する超絶技巧
井波彫刻

「日本遺産」認定のまち 井波

指定団体 井波彫刻協同組合
〒932-0226 南砺市北川733 井波彫刻総合会館内
電話 0763-82-5179
https://inamichoukoku.jp

主要素材 クスノキ、ケヤキ、キリなどの木材

南砺市井波は井波別院瑞泉寺の門前町として栄えた木彫刻の町。町を歩けば、通り沿いの工房で、彫刻師たちがトントンとノミを叩く姿が見られます。現在も、約200人の彫刻師たちが、個性豊かな作品作りを競い合う、稀有な町として知られています。

井波彫刻は、江戸時代中期に火災で焼失した瑞泉寺本堂の再建の際に、京都本願寺より派遣された御用彫刻師の前川三四郎から、地元の宮大工たちが彫刻の技を習ったのがはじまりです。井波彫刻では仕上げ彫りまでに200から300種類ものノミと彫刻刀を使い分け、厚みのある木材から、立体感、躍動感ある絵柄を彫り出すのが特徴です。

手がけるのは、全国のお寺や神社、住宅の欄間、獅子頭、神輿、曳山、だんじりなど祭りの山車の彫刻、仏像、天神さま、おひなさま、美術品、衝立、看板の彫刻、文化財の修復や復元など、さまざま。日本各地から木彫刻のあらゆる注文が集まります。井波では若手育成のため、1947（昭和22）年に井波彫刻の訓練校を創設。全国から集まる若者は親方の元で修行をしながら、訓練校でも学びます。修行後は、独自の作品世界へと挑みます。

＼技術を現代へ／
CONTEMPORARY
木彫シャンデリアなど、個性豊かな商品を開発中

＼伝統的な技術／
TRADITIONAL
欄間は両側から見ても立体的で、枠から「こぼれる」のが見せ所。

✓point

井波彫刻の世界は、個性にあふれている

井波彫刻の真骨頂とも言える、立体的で枠からこぼれるような欄間。明治期には寺院欄間の技を、住宅用欄間にも生かすようになりました。一つとして同じものはなく、顧客の要望や建物に合わせて、オンリーワンのものづくりが行われています。例えば、若手の複数の作家が共同で仕上げた木彫のシャンデリアもその一つ。同じ技術を学んだ者同士、阿吽の呼吸で一つの作品に仕上げています。注文に合わせて自由にデザインを変えられるのも特徴です。

見学できます

瑞泉寺は1390年に建立。3度の火災に遭い、再建の際に京都の彫刻師が指導し、井波彫刻の歴史が始まりました。山門の「波に龍」、式台門の「獅子の子落とし」、本堂の唐挟間（欄間）、太子堂の「手挟（たばさみ）」など、見事な技が随所でご覧になれます。

真宗大谷派（東本願寺）井波別院瑞泉寺

所 〒930-0211 南砺市井波3050
休 なし（要確認）
開 9:00～16:30
電 0763-82-0004

体験・見学できます

いなみ木彫りの里創遊館では、木彫刻の工房を見学できるほか、日曜日のみ木彫刻のクラフト体験が可能（要予約）。隣接する井波彫刻総合会館では、井波彫刻の多彩な作品をご覧いただけます。

道の駅井波 いなみ木彫りの里 創遊館

所 〒932-0226南砺市北川730
電 0763-82-5757

井波彫刻総合会館

所 〒932-0226南砺市北川733
電 0763-82-5158

欄間作りの工程、教えます

下絵を木に写し取り、糸ノコで穴をあける透かし彫りから、荒おとし、荒彫り、小彫り、仕上げ彫りへ。ヤスリを使わず、ノミの彫りあとだけで仕上げます。

漆の美は時を超える
高岡漆器

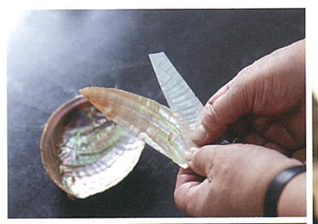
「日本遺産」認定のまち 高岡

指定団体 伝統工芸高岡漆器協同組合
〒933-0909 高岡市開発本町1-1
電話 0766-22-2097 http://shikki.ec-net.jp

主要素材 木、漆、夜光貝、アワビ貝、白蝶貝など

高岡漆器は加賀前田家二代当主の前田利長が1609（慶長14）年に高岡の町を開き、指物職人が高岡に移り住んだことにはじまります。指物師は箪笥や長持などを作り、朱漆を塗る「赤もの」を製作。それが広まり、多くの職人が高岡に集まりました。その後、辻丹甫が京都で学び、擬堆黒や存星など中国風の技術を取り入れます。江戸末期には、石井勇助が中国の漆器を研究し、唐風の花鳥や山水を錆絵で描き出し、箔絵、玉石、青貝など複数の技法を合わせる「勇助塗」を確立。明治期には多くの茶棚や飾り棚などが作られました。また、富山県工芸学校（現高岡工芸高校）も設立され、彫刻科の教諭、村上九郎作が「彫刻塗」の鯛盆を作り人気に。「青貝塗（螺鈿）」の技も多くの漆器で取り入れられました。この伝統的な3つの技法は、動く美術館と言われる高岡御車山などでもご覧になれます。

昭和に入ると生産と販売の近代化が図られ、戦後には木地、彫刻、加飾の工程が分業化し、記念品などを量産する時代へ。最近ではアクセサリーやスマホケース、螺鈿ガラス、箸など、現代の暮らしに合った漆器が数多く作られています。



＼技術を現代へ／
CONTEMPORARY
箸を青貝塗（螺鈿）で飾った商品。県内外で体験イベントも開催!

＼伝統的な技術／
TRADITIONAL
大正時代の青貝塗の燭台。アワビなどで描く繊細な絵柄に感嘆。

✓point

青貝塗で見せる、高岡漆器の美

高岡漆器を代表する伝統的技法は、彫刻塗、勇助塗、青貝塗（螺鈿）の三つ。彫刻塗は江戸中期から伝わる技法で高岡御車山には技の最高峰のものが見られます。勇助塗は明治期に花開いた、複数の技を合わせた技巧。青貝塗は、江戸初期に富山藩主前田正甫公が京都から招いた杣田清輔（そまだきよすけ）に影響を受けて発展したとされます。貝の色が青やピンクに輝く華やかさ、優美さは格別。販売のほか螺鈿の製作体験イベントも国内外で開催されています。

見学できます

国の重要有形・無形民俗文化財であり、ユネスコ無形文化遺産の高岡御車山を通年展示。金工、漆工、染織など技の結晶や歴史を展示解説。新しく作られた平成の御車山には、青貝塗の技が施されています。シアターでは豪華絢爛な祭りの様子をご覧になれます。

高岡御車山会館

所 〒933-0928 高岡市守山町 47−1
休 火曜日（火曜日が祝日のときは翌平日）、年末年始
開 9：00～17：00（入館は16:30まで）
電 0766-30-2497
料 一般（高校生以上）300円

青貝塗の工程、教えます

七色に輝く青貝塗

九州や沖縄など、おもに温かい地域で獲れた天然のアワビ貝、夜光貝、白蝶貝や黒蝶貝などの真珠層の部分を0.1ミリほどに薄く削ります。自然な貝の色を生かすほか、削った貝の裏側に顔料を塗ったり、金箔、銀箔を貼るなどして彩色する、「伏彩色」という技法も高岡漆器の特徴の一つです。漆と砥の粉を混ぜて描く錆絵などの技法と組み合わせると、より立体的で華やかになります。

青貝塗の美しさの秘密

青貝塗は、アワビ貝、夜光貝、蝶貝などを薄く削ったものを、絵柄に合わせてさまざまな形に断ち切り、漆を塗った面に貼っていく技法です。真珠のような貝の輝きや微妙な色合いの違いを見定め、繊細に模様を描き出します。漆の黒が薄い貝を通して透けると青く見えることから、高岡では「青貝塗」と呼ばれてきました。漆を何度も塗り重ね、研ぎ、磨くことで漆黒が生まれ、螺鈿の奥深い光が現れます。高岡の「青貝塗」は、全国の螺鈿の約9割を占めるとも言われています。

使うほどに、艶も風合いも増す 庄川挽物木地

指定団体 庄川木工挽物会
〒932-0315 砺波市庄川町示野116（庄川商工会内）
電話 0763-82-1155
www.shokoren-toyama.or.jp/shogawa-wood/

主要素材 ケヤキ、トチなどの天然木、漆

砺波市庄川町は、江戸時代から加賀藩が飛騨や五箇山の木材を庄川の流れで川下げした、木材の一大集積地として栄えました。江戸末期には魚津から越後屋清次という木地師が移り住み、原木を利用してロクロで挽く挽物木地の生産がはじまりました。明治期には、高岡漆器や輪島塗などの漆器の下木地産地にもなりました。

現在まで続く伝統の庄川挽物木地。丸太をタテに切り、板状に製材した木材を使ってロクロで挽いていく「横挽き」が特徴です。この技法により変化に富んだ杢目が現れ、唯一無二の品になります。材料は杢目が美しい国産のトチやケヤキを中心に、神代ケヤキ、黒檀、松などさまざま。木地師は丸太の段階で良質な原木を見極めて購入し、製材した板を1年以上、外に積んで自然乾燥させます。それにより、狂いがない上質な品物になるのです。杢目を生かし拭き漆で仕上げる物のほか、白木の優しい風合いの製品もあります。天然木と漆を使い、手仕事の技で作られる商品は、温かさ、心地よさを感じるものばかり。一つとして同じものはなく、使うほどに、艶や杢目の風合いが増していきます。

＼技術を現代へ／
CONTEMPORARY コーヒーカップのほか、余分な水分を吸い取るパン切りボードも。

＼伝統的な技術／
TRADITIONAL トチやケヤキの杢目が美しい、ロングセラー商品のお盆など

point

現代の暮らしにこそ、手仕事と木の温もりを。

庄川挽物木地は砺波地方の伝統行事である報恩講や法事、祭りなどの際の贈答品として、お盆や茶托、菓子器などがロングセラー商品となっています。最近では生活様式の変化からコーヒーカップやタンブラー、パン切りボードなども作られるようになりました。天然木で作られる器、カップなどは熱の伝わりが優しく、小さなお子さんにも口当たりがよく、食べやすいと評判になっています。家庭用、記念品などの多彩な商品が作られています。

大噴水がシンボルの特産館では、庄川挽物木地の商品を多数展示・販売しているほか、4月～11月の毎週日曜日、午前10時から午後3時までロクロ挽きの実演がご覧いただけます。挽物の体験については問い合わせください。

庄川水記念公園　特産館

所 〒932-0305 砺波市庄川町金屋1550
休 年末年始 開 9:00～18:00 ※12月1日～翌年2月末日は16:00閉館(4月～11月の毎週日曜日) 10:00～15:00まではロクロ挽きを実演
☎ 0763-82-5696

伝統の技で仕上げた庄川挽物木地の木工品や、庄川特産のゆずを使ったゆずソフト、お土産品などを販売しています。建物の正面には、巨大な水車や水車小屋があり、対岸の景色を眺めながら庄川清流温泉の足湯が楽しめます。

庄川水記念公園 庄川ウッドプラザ

所 〒932-0305 砺波市庄川町金屋 1550
休 年末年始※12 月 1 日～ 2 月末日は毎週火曜日休 開 9:00 ～ 18:00※12 月 1 日～ 2 月末日は 16:00 閉館
☎ 0763-82-6841

庄川挽物木地の工程、教えます

1 板積み・木取り
トチやケヤキの原木を板状に製材して1年以上自然乾燥。乾いたら、大小の円を描くように無駄なく切り落とし。ここで仕上がりの杢目が決まります。

2 乾燥・仕上げ挽き
ロクロにかけて木材を荒挽きし、火力乾燥室で乾燥させます。その後、ゼンマイガンナをはじめ、職人が手作りした道具で、外側、内側とロクロで挽きます。

3 拭き漆
白木地に生漆を数回塗り重ねていきます。庄川の挽物木地製品は杢目の面白さが見どころ。杢目がはっきり浮き出るように漆を塗る「木地見せ」が特徴です。

和紙の世界を、いつも新しく 越中和紙

指定団体 富山県和紙協同組合
〒939-2341 富山市八尾町鏡町668-4（桂樹舎内）
電話 076-455-1184
www.etchu-washi.jp/

主要素材 コウゾ、トロロアオイ、顔料など

豊かで清らかな水に恵まれた富山県の自然風土の中で、それぞれの地域の歴史に根付き、暮らしに合った和紙が作られてきました。県内で国の伝統的工芸品に指定されているのは、八尾和紙、五箇山和紙、蛭谷和紙の三つの産地。その総称が越中和紙です。

八尾の山間部では富山県から全国へ届けられた「売薬」の薬の包み紙などの加工用に、丈夫な和紙が作られていました。人間国宝の故芹沢銈介氏との交流から、鮮やかな型染めの和紙が生み出され、多彩な和紙小物が人気を集めています。

世界遺産に登録された合掌造り集落がある五箇山地方では、江戸時代は加賀藩の御料紙として和紙が作られていました。標高が高い五箇山では朝昼の寒暖差が大きく、コウゾはゆっくり育ちます。そのため繊維は緻密で、枝も細く長いものに。それを漉き込むことで、より丈夫な和紙ができるのです。自然素材だけで作る和紙は1000年持つとされ、文化財の修復用紙としても使われています。

そして、昭和初期には多くの紙漉き場があった朝日町の蛭谷地区。和紙文化の復活に向けて、蛭谷和紙伝承協議会が発足するなど、新たな活動が始まっています。

＼技術を現代へ／
CONTEMPORARY クッションやスリッパ、名刺入れなどを、カラフルで丈夫な和紙でデザイン

＼伝統的な技術／
TRADITIONAL かつて農家で冬に漉いた2000枚の傘紙の束を再現したもの。

point

伝統の和紙を、いま、使いたいものに。

八尾、五箇山、蛭谷など山間部では、冬の農閑期に紙漉きが行われていました。ネリと呼ばれ、糊として使うトロロアオイは気温が高いと粘性がなくなるため、水の冷たい冬場が最盛期。写真は八尾の農家で冬の間に漉いたひと丸2000枚の傘紙の束の再現です。春の雪解けとともに、丁寧な荷姿で出荷されました。現在の八尾や五箇山では、型染めしたり、鮮やかな色を施した丈夫なもみ紙で、おしゃれな小物の開発が行われています。

八尾和紙の小物、型染め製品が数多く揃い、隣接する工房では製造工程の見学や紙漉き体験も可能です。和紙文庫では和紙にまつわる文献や紙の発展過程を紹介するほか、和紙を材料にした生活用品などを展示しています。

有限会社 桂樹舎

所 〒939-2341 富山市八尾町鏡町668-4
休 月曜日(祝日の場合は翌火曜日)、9/5・6、12/29～1/10 開 和紙文庫 10:00～17:00(入館16:30まで) ☎ 076-455-1184
料 紙漉き体験:700円 2名様より

和紙体験館で紙漉き体験ができるほか、県内最大の和紙のお店として、大判の和紙から小物まで、ここでしか買えない和紙製品が揃います。デザイナーとコラボした鮮やかな蛍光色の和紙ブランドは国内外で人気が高まっています。

道の駅たいら　五箇山和紙の里

所 〒939-1905 南砺市東中江215
休 年末年始
開 9:00～17:00
☎ 0763-66-2223
申 体験はお一人様700円から要予約

富山の和紙産地の特徴、教えます

八尾和紙
型染めの技法を使い、顔料を使って一枚一枚、手作業で染めた丈夫な和紙を、カレンダーやインテリア小物、文具などのカラフルな製品にして販売しています。

五箇山和紙
山で育てたコウゾの皮を雪晒しすると、雪の水分と太陽光で白くなります。障子紙などのほか、「悠久紙」は桂離宮などの文化財修復にも使われています。

蛭谷和紙
富山県朝日町の蛭谷地区は朝日岳の麓にあり、清らかな水と自然に恵まれたところ。保存性に優れた素材の和紙ではがき等も作られています。

全国一の菅笠の生産地 越中福岡の菅笠

指定団体 越中福岡の菅笠振興会
〒939-0116 高岡市福岡町下蓑255-1
電話 0766-64-2702 https://sugegasa.jp

主要素材 スゲ、竹、糸

菅笠は雨よけや日よけなど、農作業などに欠かせない日用品として、かつては日本各地で作られていました。スゲは雨や雪をはじく撥水効果があり、防虫効果もあるとされています。現在は高岡市福岡町で、全国の9割以上の菅笠が作られています。福岡町の菅笠づくりは400年以上の歴史があり、国の重要無形民俗文化財に指定。京都の禅僧から、あるいは伊勢国から伝わったとも言われています。江戸中期に加賀藩の奨励のもとで本格的な生産が始まり、最盛期には年間約210万蓋（がい）を生産。現在は、年間約3万蓋（がい）が約70人の作り手によって生産されています。

元々は湿地帯で良質なスゲが収穫できた福岡町。現在は専用の田んぼで手作業によりスゲを栽培しています。スゲ作りをはじめ、笠の土台となる菅骨作り、スゲを針と黄色い糸で縫いつける笠縫い、そして、得意先への販売まで一貫して行われています。日本各地から祭りや民謡、時代劇などに使う菅笠の注文が入り、角笠、花笠、三度笠、一文字笠、市女笠など、さまざまな形の菅笠が作られています。伝統の菅笠作りを次世代へ伝えるため、後継者育成や商品開発も活発に行われています。

技術を現代へ CONTEMPORARY
スゲの撥水・防虫効果を生かしたカゴや、染めが美しいコースターも開発。

伝統的な技術 TRADITIONAL
角笠、一文字笠、三度笠など、伝統的な形の多様な菅笠を製造

point

菅笠の良さを生かして、普段使いできるものを。

福岡町では各地から入る注文に対応し、伝統的でさまざまな形の菅笠を手作りしています。また、菅笠づくりの技術やスゲの特性を生かした、日常生活で使用できる新商品開発にも積極的です。笠の内側の竹の骨組みの美しさを生かしたカゴのほか、名刺入れ、鍋敷き、アクセサリー、帽子なども商品化。後継者育成事業で学び、質の高い菅笠やスゲを使った商品を作る若手作家も活躍しているほか、高岡市内の学校でも菅笠作りを指導しています。

見学・購入できます

築100年の蔵を改装して作られた土産物店。「さんちょんびん」とは産地直送品の意味。福岡町で作られている多彩な菅笠を展示販売し、スゲを使った新商品が数多く揃います。カフェも併設され、菅笠作りを学ぶ皆さんの研修施設としても活用。自由に見学もできます。

さんちょんびん蔵

所 〒939-0111 高岡市福岡町福岡1077-5
休 火曜日、木曜日
開 9:00～16:00
TEL 0766-64-1661

見学できます

洋風を真似た公民館として、かつて役場としても使われた建物を現地に移築。1997年に国の登録有形文化財となっています。館内では、菅笠作りの歴史や製法などについて、実際に使われた道具のほか、写真パネル、資料などで詳しく解説・展示されています。

高岡市福岡歴史民俗資料館

所 〒939-0143 高岡市福岡町下向田字畦ケ谷内15 休 月曜日、祝日の翌日、冬季休館（12月29日～2月末日）
開 9:00～16:30
TEL 0766-64-5602

菅笠作りの工程、教えます

菅笠作りは秋のスゲの植え付けから。翌年、7月末の晴天時に刈り取り、天日干し。骨剥し職人が竹で菅骨を作り、スゲを針と黄色い木綿糸で縫う笠縫いへ。美しい形、縫い目に仕上げるには熟練の技が必要です。

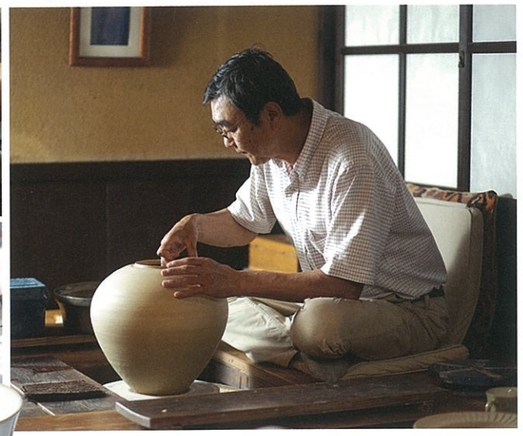
故郷の土を知り、より高みへ 越中瀬戸焼

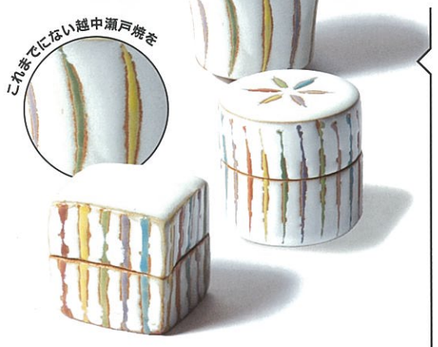
指定団体 かなくれ会
連絡先はHPよりご確認ください。
https://kanakurekai.com

主要素材 地元で採れる赤褐色、黄、青、白などの粘土
木灰、藁灰など

越中瀬戸焼は430年ほど前（天正・文禄年間1590年前後）に、立山山麓にある立山町上末に、加賀前田家が尾張の瀬戸焼の陶工を招いてやきものを作らせたのがはじまりです。上末は平安時代初期から須恵器の産地であり、やきものに適した良質で多様な土が産出するところでした。加賀藩の保護を受けた御用窯として、陶工たちは、なかでも貴重な白土「しらつち」を独占的に使用して、茶入や水指などの茶器を作っていました。その後、新たに瀬戸村ができると、村を上げて多くの日常雑器なども作られ、江戸時代を通して発展しました。明治維新後は全国的に磁器の流通が盛んになり、多くの窯元が屋根瓦業へ転換。陶器は僅かになります。しかし、昭和に入り、越中瀬戸焼の復興を目指す人々の努力で再興を果たしました。

現在では4つの窯元があり、5人の陶芸家と陶農館に在籍する研修生2名が作陶しています。郷土のやきものをより高い内容で、広く発信するために「かなくれ会」が発足。かなくれとは土地の言葉で陶片のこと。立山の土と富山県の風土に根付いた、新しい作品づくりを進めようと活動しています。





技術を現代へ CONTEMPORARY
伝統の白土や釉薬を使いながら、新しい色使いの作品も。

伝統的な技術 TRADITIONAL
上質な土、釉薬の材料は、立山町周辺で産出するものから。

point

恵まれた自然風土が、質の高いやきものの源。

越中瀬戸焼が作られる立山町。良質で多様な土、釉薬を作るための藁などが、地元で手に入る恵まれた環境にあります。古くから産出する貴重な白土は鉄分が少なく、粒子が細かいため細かな細工が可能。耐火度も高く、高温で焼くことができるため硬く焼き締まり、薄く、軽く、硬いやきものができます。伝統の技法を使い新しい発想で生み出される作品は、故スティーブ・ジョブズも愛用していました。各窯元の個性豊かな作品を、ご覧ください。

体験・見学できます

陶農館は越中瀬戸焼の窯元5人の作品の展示販売と陶芸体験を行っています。陶芸体験では越中瀬戸土を使った手びねりコースや、手軽に楽しめる絵付コースなど、やきものの魅力を味わるほか、登り窯の貸し出しも行っています。

越中陶の里「陶農館」

所 〒930-3247 富山県中新川郡立山町瀬戸新31 休 火曜日（火曜日が祝日の場合は水曜日）・年末年始
開 9:00～16:00 TEL 076-462-3929
料 陶芸体験：要予約 1,100円から

越中瀬戸焼の制作工程、教えます

1 山の土で土作り
立山町周辺の粘土を掘り、水に溶かす水簸（すいひ）という方法などで、粗い砂などを丁寧に取り除きます。目的に合わせて、粘土の細かさを調整します。

2 熟練の土練り
粘土を手で練り、硬さを均一にして空気を抜きます。菊練りという手法では、土を回転させながら菊のような模様に。この技の習得には、数年が必要です。

3 成型・乾燥・釉薬作り
ロクロや手びねりで形を整えます。乾燥したら素焼きに。木灰や長石の粉と、立山の田んぼで採れた藁を藁灰にしたものなどで多彩な釉薬を作ります。

4 施釉・本焼き
器に釉薬をかけて本焼きへ。登り窯の火入れをして数日は温度調整を。周辺で採れた松の木は、一番火力の強い燃料となり、最高温度は約1300度に。

鉄から始まった高岡鋳物
高岡鉄器

指定団体 伝統工芸高岡銅器振興協同組合
〒933-0909 高岡市開発本町1-1
電話 0766-24-8565

主要素材 鉄

400年以上続く高岡鋳物の歴史は、高岡鉄器にはじまります。高岡を開町した加賀前田家二代当主の前田利長が1611（慶長16）年に、近隣の村から鋳物師を招き、金屋町に鋳物場を開かせました。鋳物師たちは加賀藩の手厚い保護を受けて、最初は鉄の鍋、釜、鉄瓶などの生活道具や、鋤、鍬などの農耕具を鉄鋳物で作っていました。

やがて、高岡の鋳物師たちは能登で作られていた塩釜作りにも進出、さらに、北前船の寄港地、伏木がある高岡では北海道との交易が盛んで、明治から大正にかけては、北海道で大量に獲れた、にしんで作るにしん粕を作るための「にしん釜」が金屋町で数多く生産され北海道に運ばれました。

戦後は高岡銅器の発展とともに、美術鉄器の生産が盛んとなり、現在でも芸術性の高い茶釜や鉄瓶、干支や記念品などの置物、風鈴、文鎮、調理用具など、鉄の特性を生かした多彩なものづくりが行われています。昔ながらの「土間込め」という、畑のように土中に型を並べて鉄鋳物を吹く工場も健在です。江戸時代から現代まで続く高岡鉄器の良さを後世に伝えようと、鉄の特性を生かした商品開発が行われています。

\技術を現代へ/
CONTEMPORARY 鉄の重厚感と、鋳肌もポイントです。

\伝統的な技術/
TRADITIONAL 古い茶釜など、錆びにくい鉄を再利用して作られる伝統の茶釜。

point

鋳肌の風合いを楽しむ、伝統&最新の鉄器

伝統の茶釜は、詫びた「釜肌」が見所です。「肌打ち」という技法で、鋳型に粘土を水で溶かしたもので絵を描くように繊細な模様をつけ、双型鋳造法で製作します。材料は江戸時代の茶釜など、木炭を燃料にしていた頃の、錆びにくく良質な鉄です。伝統の技を大切にする一方で、最近では鉄の皿など、これまでになかった商品開発も行われています。鉄の重厚な存在感、さらに、鉄の特性を生かしたキッチン用具なども作られています。

高岡鋳物発祥の地、江戸時代からの建物が残る金屋町にある高岡市鋳物資料館。高岡鋳物の歴史を詳しく紹介するほか、鋳物に使う道具や優れた作品、ニシン釜なども展示。かつて火を起こすために足で踏んで風を送った「たたら踏み」なども体験できます。

高岡市鋳物資料館

所 〒933-0841 高岡市金屋町1-5
休 毎週火曜日（火曜が祝日の場合は翌日）、年末年始
開 9:00～16:30
☎ 0766-28-6088

鉄鋳物の作り方、教えます

1 原型・鋳型づくり
完成イメージを元に原型を作り、砂を使った生型などで鋳型を製作。溶かした鉄「湯」を流す湯道もつけます。一度に複数個できる型の場合もあります。

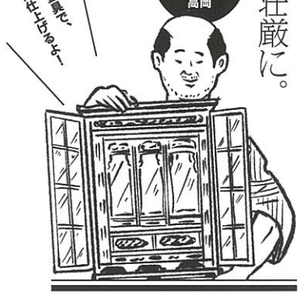
2 鋳造
約1500度まで温度を上げた炉で溶かした鉄「湯」を型に流し込みます。形が複雑で細かな場合、細部まできれいな鋳物を吹くには、経験と熟練の技が必要です。

3 仕上げ・着色
鋳物ができたら、湯口やバリ、表面の砂など不要な部分を削り、さらに機械を使い砥石などで研磨。サンドペーパーやリューターなどで表面を整え、着色へ。

純金の輝きで、極楽浄土を荘厳に。
高岡仏壇

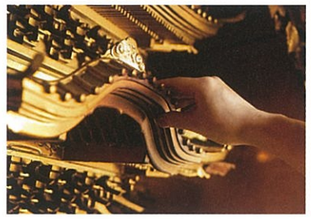
指定団体 高岡仏壇工匠会
〒933-0101 高岡市伏木国分1-4-40
電話 0766-44-2801

主要素材 青森ヒバ、イチョウ、漆、金箔、真鍮、銅板など



高岡伝統の金工や漆工、木工の技の粋を集めて作られる高岡仏壇は、大型の美術工芸品とも言えます。仏壇とは、寺院の本尊を安置する宮殿（くうでん）を模して小型にしたもので、江戸時代から一般用に作られるようになりました。真宗王国と言われる富山県や北陸では浄土真宗の西本願寺と東本願寺の阿弥陀堂の宮殿を模した「金仏壇」が主流です。宗派ごとに仏壇や仏具の形式は少しずつ異なりますが、高岡では西本願寺のものが多く、金箔を多く使い、金具、屋根、彫刻などの装飾で極楽浄土の荘厳さが表現されています。富山県内でも明治以降に一般家庭に仏壇が広まり、豪華な加飾が施されるようになりました。現在も仏間に大きな仏壇がある家庭は珍しくありません。

高岡では木地、彫刻、塗箔、金具、宮殿の屋根、扉の組子、蒔絵などを手がける約7業種の職人や作家たちが、分業制で仏壇製作に携わっています。使う木材は、青森ヒバ、イチョウなど硬くて虫に強い材料。工程ごとに繊細で高度な技で部品を作り、すべてを組み立てて仕上げます。高岡仏壇は、優れた職人たちが揃ってはじめて製造が可能な総合芸術なのです。



\技術を現代へ/
CONTEMPORARY 漆で丁寧に下地を作って箔押しすると、長持ちする仏壇に。

\伝統的な技術/
TRADITIONAL 70代の仏壇を仕上げるには、約700～1000枚の金箔を使います。

point

細部に技が光る、伝統の高岡仏壇。

高岡での仏壇作りは、元々は家具を作る指物師が手がけて発展。大きさは中に掛ける掛け軸の幅に合わせて、「代」を単位に尺貫法で表します。写真の仏壇は70代で前幅2尺（約61㎝）。一番大きなものは200代で、前幅は3尺6寸（約110㎝）。漆を何度も塗っては研いでを繰り返すことで下地を作り、箔押しへ。金箔は手作業で伸ばした縁付のものを、大きな仏壇で2000枚ほど使用します。台紙の和紙の模様が金箔にうつり、ろうそくの灯りが柔らかに反射します。

高岡仏壇の展示のほか、国の伝統的工芸品（高岡銅器、高岡漆器、井波彫刻、庄川挽物木地、越中和紙、越中福岡の菅笠）を展示販売。工芸品の製作工程や歴史も紹介しています。また、錫製ぐいのみ鋳物体験や、蒔絵の漆器体験ができます。

高岡地域地場産業センター

所 〒933-0909 高岡市開発本町1-1
休 毎週火曜日（年末年始）
開 9:30～17:00
☎ 0766-25-8283
料 漆器製作体験:3,000円～

港町伏木にある浄土真宗本願寺派の勝興寺。本願寺八世蓮如上人が1471（文明3）年に越中の拠点として開山。地元では「ふるこはん」と親しみを込めて呼ばれ、20年余りの大修理を実施。破格の大きさの本堂をはじめ、12棟が国の重要文化財となっています。

雲龍山 勝興寺

所 〒933-0112 高岡市伏木古国府17番1号
休 なし（要確認）
開 9:00～16:00（入場は15:30まで）
☎ 0766-44-0037

未来へつなぐ職人の技

仏壇作りの技は、文化財修復にも

木地師や塗師、金工など、高岡仏壇の伝統の技を受け継ぐ職人たちは、一般向けの仏壇製造や修理のほか、文化財の修復事業にも数多く携わっています。高岡市伏木にある浄土真宗の勝興寺では平成の大修理が行われ、国の重要文化財に指定された本堂の阿弥陀如来像を安置する宮殿や、御内仏という住職とその家族の仏壇の修復も高岡の職人たちが手がけました。ユネスコ無形文化遺産の高岡御車山の車輪、金具などの修復も行っています。これらの修復には高岡漆器、高岡銅器、井波彫刻の職人の技も生かされ、次世代への技術継承が行われています。

優しい表情と、土の温もりを とやま土人形

指定団体 とやま土人形伝承会
〒930-0881 富山市安養坊1118-1
電話 076-431-4464
www.city.toyama.toyama.jp/etc/minzokuningyo/tuti/tuti.html

主要素材 粘土、絵の具など

一つひとつ手作りで仕上げる、とやま土人形。素朴で愛らしい人形に触れると、思わず笑顔になります。1848～54年（嘉永年間）、富山藩十代藩主の前田利保公が、尾張の陶工、加藤家の職人の広瀬秀信を招き、現在の富山市桜木町にあった千歳御殿に千歳窯を開いて陶器を作らせました。秀信の子、安次郎が陶器づくりのかたわら、天神臥牛を焼いて献上したのが、とやま土人形のはじまりとされています。

江戸末期以降、信仰にまつわるものや縁起物、魔除け、子供の玩具として親しまれ、代表的なものには、学問の神様である天神様や桃の節句の抱き雛があります。昭和初期まで、土人形屋は数軒ありましたが、やがて広瀬家から技法を学んだ渡辺家だけが伝統の技法を受け継いでいきました。三代目の渡辺信秀氏には後継者がいなかったことから、「とやま土人形伝承会」が結成され、受講生たちが伝統の技を学びました。1997（平成9）年、渡辺氏は、受け継いだ型や技法の全てを「とやま土人形伝承会」に継承。現在は伝承会が、伝統技法を後世に伝えようと活動を続けています。

技術を現代へ CONTEMPORARY
細身の招き猫が富山らしさ。干支人形は現代的な可愛らしさで。

伝統的な技術 TRADITIONAL
伝統の天神飾りには、随身、狛犬、灯籠、神官、太鼓なども。

point

しあわせを願って飾る、伝統と最新の土人形。

学問の神様を祀る、天神信仰の盛んな富山県では、男子が生まれた富山市内の家で、お正月に土人形の天神様を飾る風習がありました。伝統の天神飾りのほか、お雛様や鯉のぼりなどの節句人形、おわら、薬売りなど郷土色豊かな土人形もあります。古くからの型を踏襲しながら、現代的な表情で絵付けされる招き猫や、毎年、新作が発表される干支の人形も人気。作り手によって微妙に表情やデザインが異なり、自分のお気に入りを選ぶ楽しみがあります。

とやま土人形工房では、数百点の土人形を展示販売するほか、素焼きをして白く塗られた土人形に好きな絵柄を描く絵付け体験ができます。人形では抱き雛と招き猫、土鈴では干支、ふくろう、鯉のぼり、ライトレールなどから選べます。

とやま土人形工房

所 〒930-0881富山市安養坊1118-1
休 年末年始（臨時の開館・休館あり）
開 9:00～16:30 ☎ 076-431-4464
料 絵付け体験:人形700円 土鈴600円
受付時間:10:00～15:00 ※10名様以上要予約

とやま土人形の制作工程、教えます

1 型作り
表と裏の割れ型を作ります。大正時代の古い型をそのまま利用したり、古い型を元に、新たな型を起こします。新作では一から型を製作しています。

2 型込め
5ミリ程度の厚さの粘土を、表と裏の型にそれぞれ入れ、細かな表情まで写し取ります。古い型は大切に保存するため、1日1回、1体だけに使います。

3 素焼き
型から外して表と裏を合わせ、「ドベ」という粘土を溶かしたもので接着して形を整えます。一週間ほど乾燥させ、800度の窯で約8時間かけて素焼きにします。

4 絵付け
素焼きしたものを白く塗り、表面を滑らかにしてから絵付けへ。分業制ではなく、1つの人形の型込めから絵付けまで、1人で仕上げているのが特徴です。

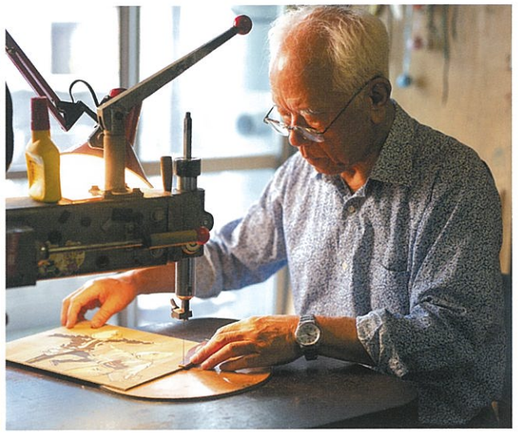
天然木で、自由自在に描く技 富山木象嵌

指定団体 とやま木象嵌工芸会
〒930-0121 富山市呉羽町3918-32
電話 076-434-0150

主要素材 多種多様な天然木、和紙など

さまざまな色合いの天然木をはめ込み、自然や風物を自由に描く富山木象嵌。古くは正倉院の宝物に、その技が見られます。富山木象嵌は、糸鋸ミシンを使った近代木象嵌の第一人者、箱根町の白川洗石に、富山県生まれの中島杢堂が県立工芸学校（現高岡工芸高校）を卒業した1907（明治40）年から2年余り弟子入りして技術を習得し、富山県で広めたのがはじまりです。中島は独自の手法を研究し、木の厚みがあり、量産できない木象嵌を作り価値を高めました。立山や雷鳥など、富山県の風物を描いた作品も数多く製作。中島の弟子やその教え子たちが、今日まで技術を継承、発展させています。

富山木象嵌は杢目や色合いを生かすため、木は無着色で使用し、材料は朴木、神代朴、神代杉、黒柿、黒檀、胡桃、銀杏、栃の木など、使用木材は数十種類にもなります。最近では額装の作品のほかに、日常で使える商品も開発。とやま木象嵌工芸会では、作品展示や販売のほか、後継者への技術指導、一般の方の体験なども実施しており、富山木象嵌の素晴らしさを次世代へ伝えていく取り組みが進められています。



技術を現代へ CONTEMPORARY
アルミと木、銅と木など、異素材に木象嵌を施したお皿も。

伝統的な技術 TRADITIONAL
富山県の風物を描いた作品など、額装した大小の作品を製作。

point

伝統の技術をもとに、自由な感性で創作。

白、黒、紺、赤などの色の木材を、着色せずに図柄に合わせて自由に使い分ける富山木象嵌。その第一人者である朴木立堂氏は、薄くスライスした木象嵌を和紙や板に貼ってはめ込むことで、より精度が高く、狂いが出ない独自の技術を考案。次世代の技術継承にも尽力されています。これまで数多くの作品を発表し、絵画のような額装作品のほか、最近では若手によって、アルミや銅などの異素材に木象嵌を施した皿、スマホケースなども開発されています。

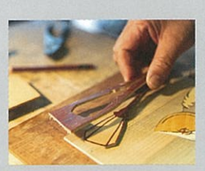
富山木象嵌の優れた技術を継承しようと、とやま木象嵌工芸会では、技術の研究や若手への指導、商品開発、木象嵌体験などのイベントも開催。射水市の永森家具では富山木象嵌のさまざまな作品を展示するほか、ご希望の方には木象嵌の体験会を開いています。

永森家具

所 〒939-0341射水市三ケ3331
休 年末年始 開 10:00～18:00
☎ 0766-55-1270 申 木象嵌体験は土日限定で要予約。料金は材料に応じて。永森家具のインスタグラムでも情報発信中

富山木象嵌の制作工程、教えます

1 断裁
図柄を部分に分け、色や種類の異なった木を2枚重ね、糸鋸ミシンで木取り（断裁）します。たくさんの種板（パーツ）を作ってはめる時間のかかる作業です。

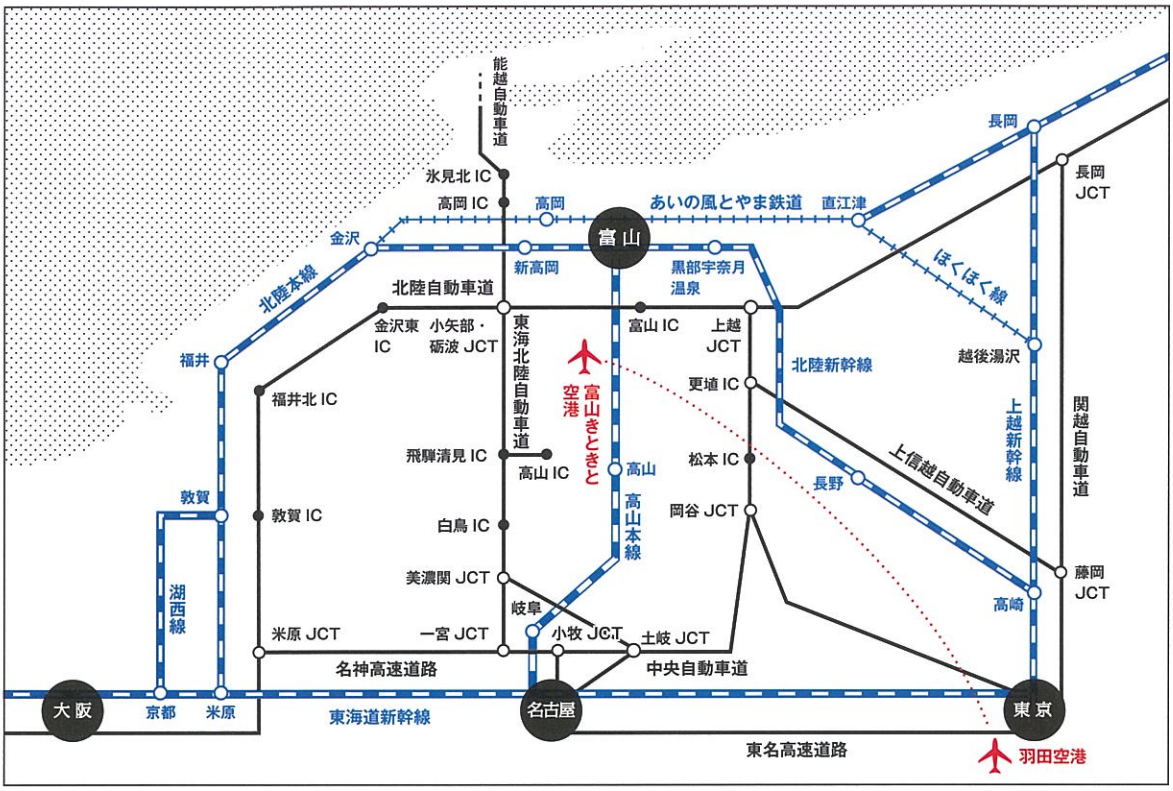


2 断裁すると
2枚の木を重ねて断裁し、必要な部分だけを下の地板にはめます。写真では、周りの茶色い部分は不要に。地板にはめる行灯がきれいに切り抜けました。

3 象嵌
2枚の木を重ねて断裁したあと、下にある地板を外すと、上にあった木が隙間なくはまります。糸鋸ミシンで美しく断裁するには、高い技術が必要となります。

4 きれいにはまる理由
隙間なく木をはめるには、図柄の内側に向かって、刃物を入れる角度を少し斜めにし、下にいくほど切り抜く幅を狭く断裁。カンナを使わず高い精度で仕上げます。

富山へのアクセス



電車・新幹線

- 名古屋駅 → 金沢駅：東海道新幹線［ひかり］23分 ～米原駅～ 北陸本線［しらさぎ］1時間54分（約2時間40分）
- 大阪駅 → 金沢駅：湖西線経由北陸本線［特急サンダーバード］2時間31分（約2時間55分）
- 金沢駅 → 新高岡駅：北陸新幹線［つるぎ］［はくたか］［かがやき］（一部）13分
- 新高岡駅 → 富山駅：北陸新幹線［つるぎ］［はくたか］［かがやき］（一部）8分
- 富山駅 → 新高岡駅：北陸新幹線［つるぎ］［はくたか］［かがやき］（一部）8分
- 東京駅 → 富山駅：北陸新幹線［はくたか］［かがやき］（約2時間10分）

※所要時間は最速の場合です。

自動車・高速バス

- 東京
  - 練馬ＩＣ ＜関越自動車道＞ 藤岡ＪＣＴ ＜上信越自動車道＞ 上越ＪＣＴ ＜北陸自動車道＞ 富山：約4時間50分
  - 富山線：約6時間30分
- 名古屋
  - 小牧ＩＣ ＜名神高速道路＞ 一宮ＪＣＴ ＜東海北陸自動車道＞ 小矢部・砺波ＪＣＴ ＜北陸自動車道＞ 富山：約3時間
  - 富山線：約3時間45分
- 大阪
  - 吹田ＩＣ ＜名神高速道路＞ 米原ＪＣＴ ＜北陸自動車道＞ 小矢部・砺波ＪＣＴ ＜北陸自動車道＞ 富山：約4時間15分
  - 富山線：約5時間30分

飛行機

- 東京（約1時間）［羽田空港］→ 富山
- 上海（約2時間20分）［上海浦東国際空港］→ 富山
- 大連（約2時間25分）［大連周水子国際空港］→ 富山
- 台北（約3時間）［台湾桃園国際空港］→ 富山

富山県商工労働部 経営支援課
所 〒930-8501 富山県富山市新総曲輪 1-7 県庁東別館 3F
076-444-3249　FAX：076-444-4402

公益社団法人 とやま観光推進機構
所 〒930-8501 富山県富山市新総曲輪 1-7 県庁南別館
076-441-7722　FAX：076-431-4193

日本橋とやま館
所 〒103-0022 東京都中央区日本橋室町1-2-6 日本橋大栄ビル 1F
03-6262-2723

いきいき富山館（東京）
所 〒100-0006 東京都千代田区有楽町 2-10-1
東京交通会館 B1F
03-3213-1244　FAX：03-3287-1722

とやま
所 〒930-0002 富山県富山市新富町 1-2-3
CiC ビル 1F
076-444-7137　FAX：076-444-7133

公益財団法人
高岡地場産業センター
所 〒933-0909 富山県高岡市開発本町1－1
0766-25-8283

県外・国外の富山県事務所

首都圏本部
所 〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-6-3
都道府県会館 13 階
03-5212-9030　FAX：03-5212-9029

名古屋事務所
所 〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄 4-16-36
久屋中日ビル3階
052-261-4237　FAX：052-263-7308

大阪事務所
所 〒550-0004 大阪府大阪市西区靭本町 1-9-15
近畿富山会館 3F
06-6445-2811　FAX：06-6445-2611

大連事務所
所 〒116011 中華人民共和国遼寧省大連市
西崗区中山路 147 号　大連森ビル 7F
0411－83687879　FAX:0411－83682919

富山県

令和元年11月発行